原告団

遺族・CO裁判、災害責任追及、特集号

第八十三号

原告団レポート

遺族――古賀リツエさん

誰が、命を奪ったのか

安らかな死にぎわだったと不動尊のお告げ

遺影を胸にテレビの前で泣く

わび住まい

大牟田市諏訪町三丁目九十三番地。二階の八畳ひと間。遺族の一人――古賀リツエさんは、身ひとりの借屋住まい。

一隅にごく小さな和ダンスと洋ダンスが並び、床の間に亡夫菊一さんの位牌をおまつりしている小型の仏壇とテレビが、ぽつんとある。あと何もなく、がらんとしたたたずまいが、遺族――古賀リツエさんの生活を物語っている。

さいわい、ひとり娘の清美さん（二十六歳）一家が、これまで住んできた福岡の住居をひき払い、ついこの頃露路をはさんだ真向かいの家に越してきてくれたのがことのほかうれしい。

娘婿を杉本清孝さんといい、二人の間にはもう清一ちゃんという孫までできている。三歳だ。ちょっと見には、女の子としか映らないほどで、古賀さんならずとも可愛ゆくてならぬ。

娘婿の杉本清孝さんは、ここからこれまで通り福岡の職場に通っているというから、目に見えて老いを深めてゆく彼女の身を思うばかりの転居だったに違いない。

明るい人柄

古賀リツエさんは大正二年三月二十日の生まれだから、六十三歳。亡夫菊一さんは明治四十五年六月三十日生まれだから、今日存命していれば六十五歳のはずだ。不幸にして三池大災害のとき犠牲となり、あえなくも死んでいってしまった。行年五十二歳、惜しまれてならぬ命であった。

古賀リツエさんは、決して丈夫な体ではない。高血圧症の悩みがつきまとっている。それに顔面を、命がけの大手術をやった身でもある。彼女の顔が変形しているのは、たれの目にも一目瞭然で、どれほどの大手術だったかをしのばせる。

それは、大牟田の地であの石炭博覧会が開催された――昭和三十二年のことだった。

持ち続けてきた持病の蓄膿症がひどく悪化して、左眼をまで冒すまでにたちいたり、まるでわんをかぶせたように片頬が大きく腫れあがった。

そのままでは命とりになる。意を決して手術。鼻から左頬にかけて、親からせっかくもらった無傷の顔をズラーッと切り裂いた。湯呑み茶わんにまるまるいっぱいもの血うみが吹き出したという。

その後、幾らかなりと落ちつきを見せてはきたものの、一度変形してしまった顔が元にもどるはずはない。

だが――古賀リツエさんには、そんなことでとかく見られる卑屈な影などひとかけらもなく、明るい。堂々と生きているところは不思議にさえ思われてくる。

今は亡き古賀さんの夫・菊一さんの面影。やさしい人柄だった。

一日千円也

だが――古賀リツエさんには、としは六十三歳。おまけに高血圧症。体は傷だらけでありながら、古賀さんはそれでも働きつづけている。

荒尾市の県境にあるスーパー〝和光〟に店を出しているテンプラ屋へ。テンプラ製造のための下ごしらえが彼女に与えられた仕事だが、一日千円の日給がもらえる。「それでも昼ご飯などを食べさせてもらえますから、助かります」、と古賀さん。

数年前までは、住まいに近い八百屋にやとわれて、そこの店先に立ったこともあるが、たとえひとり身のくらしだとはいえ生きてゆくことをのぞむ以上、この苦労をいとうわけにはいかないのだ。

厚生年金から支給してもらえる遺族補償が、月にしてわずか三万二千三百九十一円也。何といままでは二万八千円に過ぎなかった。

亡夫の命とひきかえに、三つき に一度の割で渡されるこの遺族補償。これでインフレ、物価高が弱者に向かって情け容赦もなく襲いかかってくる狂乱の世を生き続けてゆけるはずがないではないか。

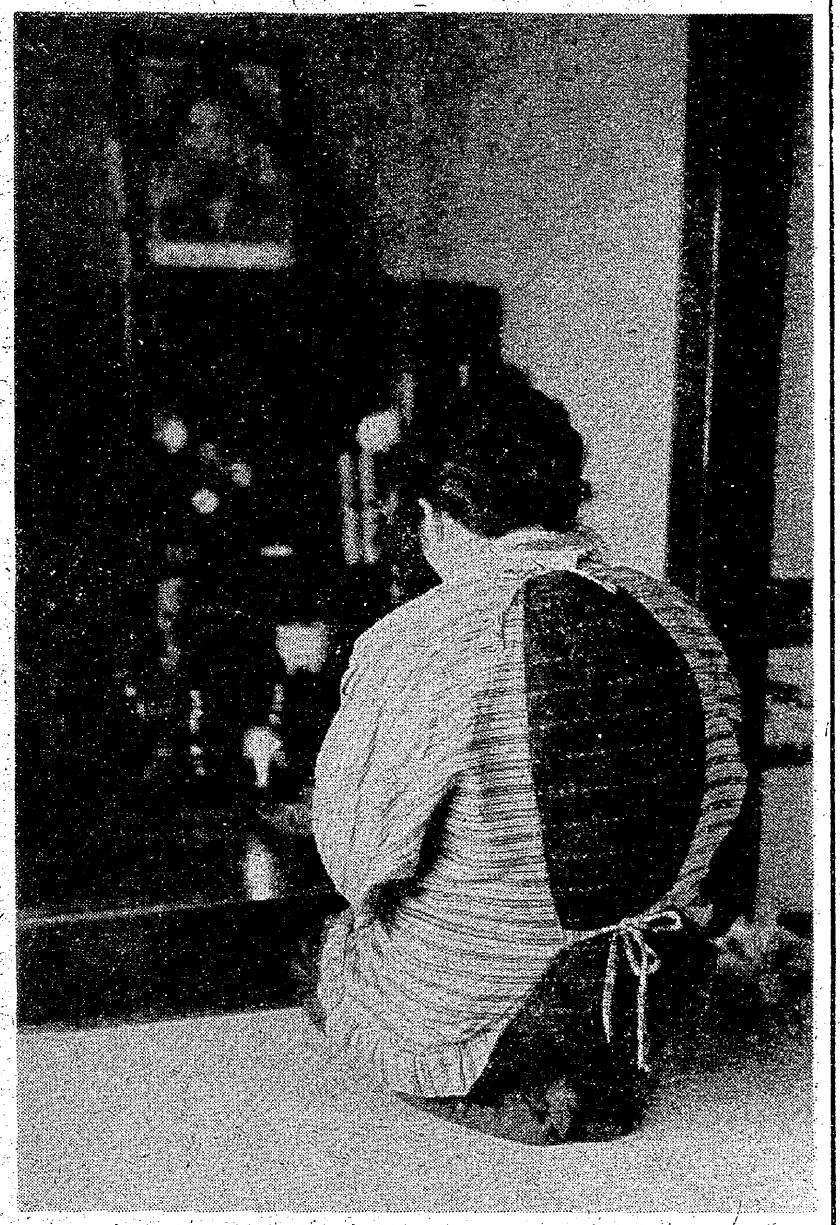
三池闘争で

亡夫菊一さんは、三川鉱の乙方仕繰工だった。無口で、おとなしいばかりの人柄だったという。

パチンコが好きで、勝てば「子どもに」と、沢山のみやげを持ち帰るのが常だった。

彼のどこが会社から買われたのか、戦後の二十四年に天皇が三池にやってきて三川鉱に入坑した際は、仕繰工のなかから特に選ばれて坑底にさげられもした。「天皇と坑内で握手した人間は、俺ばかりだぞ」、と笑いながら報告したときの菊一さんを、古賀さんはいまも忘れることはできない。

それでいて、三池闘争のときは断固として闘った。その頃三池労組が毎日発行していた例の〝日刊情報〟の配達が、どうやら菊一さんの役目だったらしい。くる日もくる日も、「団結」の文字を染め抜いたハチマキをきりりとしめては、日刊情報をこわきにかかえ走りまわっていたという。



何か心に浮べば、仏前に座るという古賀さん。

死のお告げ

その日のその刻（昭和三十八年十一月九日午後三時十五分）、古賀リツエさんは、その頃働いていた八百屋の店先にいた。

大きく大地が揺れたと同時に、ズシーンという大音響が古賀さんの耳をつんざいた。気がついたら、店先のガラス戸は木ッ葉みじんに吹っ飛んでいた。炭じん大爆発が三川鉱で起きたのだったが、三川鉱から八百屋までは直線にしてもおおよそ七百メートルはたしかだ。それでもガラス戸が吹っ飛んだのだから、爆発のすごさがわかろうではないか。

古賀リツエさんの夫菊一さんが、いまや冷い体となって白木の柩に納りながら彼女のもとに帰ったのは、爆発から二日以上もたった十一日の午後十時過ぎのことだった。静かな表情だった。彼女は「せめて主人が死にぎわなりとも静かであってほしいと、常づね信仰しています不動尊におまいりした甲斐がございました。お告げの通り、主人は安らかな往生を遂げていったのでした」

軌跡が示す

経済の高度成長政策（急激な独占資本の膨張をめざす）に目がくらんだわが国の支配層は、あと先の見分けもつかず、石炭という唯一の国内エネルギー資源放棄のハラを固めた。すべての政策を多国籍企業（過半はアメリカが占めている）に売り渡し、エネルギー源を主として石油に求めていったのである。

昭和三十年代にはいるのを合図に、「スクラップ・アンド・ビルド」の言葉で通称された石炭政策が発足。十二万炭鉱労働者の首切り。石炭産業をまるまる包んで荒れ始めた、合理化の嵐。

昭和三十四年二月二十一日、住友歌志内でガス爆発。十四人が死亡。

同年十二月二十一日、山野、新入でガス爆発。双方とも、死者がそれぞれ七人ずつ。

翌三十五年二月一日、夕張二鉱でガス爆発。四十人死亡。

同年九月二十日、杵井炭鉱（筑豊）で爆発。十三人死亡。

同月二十六日、こんどは豊州炭鉱で坑内出水。六十七人死亡。

同年十月三十一日、本岐でガス爆発。十八人死亡。

三十六年になると、六月二十九日三菱美唄でガス爆発。七人死亡。

同年十一月三十日、北海道福住炭鉱でガス爆発。二十人死亡。

三十七年七月十五日、三井芦別でガス爆発。八人死亡。

三十八年になると、災害が急激に大型化していって、五月七日大浜炭鉱で出水事故。何と百五十人の労働者の命が消える。そして、その年の十一月九日、ついに四百五十八人もの人間の命がいっぺんに吹っ飛び、八百三十九人にものぼるCO患者をつくり出す、三川鉱炭じん大爆発につながってゆくのである。その間に起きた小さな事故や災害を加えれば、数えるにも際限がない。

その間、三池の労働者が立ちあがり、許すことのできないエネルギー転換・石炭政策の前に立ちふさがって闘ったことは、まだ国民の記憶に残っているが、三池大災害はいったいだれがひき起こしたのか。それはほかでもなく、産業の別を問わず、あらゆる労働者を労働災害や続発する職業病で苦しめ、同時に公害をそこかしこにたれ流しては国民を恐怖のドン底につき落としながらも、三井を先頭に、がむしゃらに経済の高度成長政策をごり押しに進めてきた、わが国の独占支配層のそれだったのである。

十三年目が

夫菊一さんの命を大災害でもぎとられたばかりに、いろいろな障害や出来事にぶつかるたびに、「父ちゃんがおらっさんばかりにこんな苦労も……」と泣き続けてきた古賀リツエさん。

やっとの思いでテレビが買えたとき、彼女は何はさておき亡夫菊一さんの写真を、テレビのまん前に立てながら言った。

「父ちゃん、ようと見てくれんね。父ちゃんが生きていた頃貧乏のため買えなかったテレビが、やっとかえたつよ。よーく見てくれんね」

古賀リツエさんが、亡夫菊一さんの写真をしっかりと抱きながらテレビの前でよよと泣きくずれたのは、述べるまでもなかろう。

大爆発から十三年目の一一・九が、ことしもやってくる。

×　×